

被虐連理の地下リング

1

「こちらデザートのミルクアイスと、コーヒーです」

獅子谷琢巳ししたにたくみはサーブする手に内心の焦りが出ないよう注意する。今日は早く店を閉めたい。だが、大事な常連にそんなことを言うわけにはいかない。

店内に残っている客は、黒木さんただ一人。毎週金曜日に来てくれる、ありがたい常連さんだ。高いビールを頼んでくれるし、酒癖も悪くない。理想的な上客と言える。

閉店まで琢巳の仕事はもうないから、黒木さんの話相手になるのがいつもの流れだ。

「……だからさ、やっぱり子供がいた方がやる気も出るし、周りの見る目も変わると思うんだよ」

ぼんやりあいづちを打っていたら、よくない話の流れになっていた。黒木さんは町の古老で、新参者のウチにも目をかけてくれるのはありがたい。が、こういうおせっかいが玉たまに瑕きずだ。

本心から言っているのだろうし、せっかくの若者を地域に根付かせてしまいたいという打算もあるのだろう。どうあれ、琢巳としては獅子谷夫婦の微妙な話題に立ち入られたくない。

「しかし……ウチはまだまだ稼がないといけませんからね。子供を産んで育てる余裕はなかなか……」

「そこはお前さんが頑張らにやいかん。男の甲斐性かいしやうを見せにやあ」

「そうよ。私が大丈夫だつて言ってるのに、タツくんたら煮え切らないんだから」

コックコートのまま、円まどかが厨房ちゆうぼうから出てきた。ミディアムロングの髪は縛った跡が残っているが、黒木さんくらいの仲なら円は気にしない。

円は女性としては平均的な身長で、大柄な琢巳と並ぶと小さく見える。だが、一日働いた後でも崩れない背筋と足腰、そして体格に比べて豊かな胸は、頼りなさを感じさせない。

何より、物怖じしない眼差まなざししと明朗な声、表情豊かな頬は、この店の主人が誰なのかをはっきりと示していた。

「しかしな、円は俺がどうしようがギリギリまで働くだろ？」

「当然でしょ、タツくんのパンも美味おいしいけど、この町には私の料理が必要なんだから」

「それが心配なんだよ……。円はいつも無理するから……」

「タツくんが心配しすぎなだけ。いつも何とかなってるでしょ」

「夜の学校で肝試ししようって言ったとき、俺が監視カメラに気付かなかったら大事になってたよな？」

「うっ」

「裏山を探検しようって言ったとき、俺が親に言っておかなかったら一晩山で過とごす羽目になってたよな？」

「ぐっ」

「県大会の前日に……」

「あーもう！ それは子供の頃の話でしょ！ とにかく、私の体のことは私が一番分かるんだから！」

ズズツ、とわざとらしくコーヒを啜る音が響く。振り返ると、黒木さんは席を立っていた。

「うんうん、夫婦で仲良く話し合つてな。夜は短いんだから、お節介ジジイは退散しますよ。旦那さんも朝早いでしょう」

「あ……はい、ご利用ありがとうございます。あと、明日は臨時休業にします。すみませんが、パンも焼きません」

「そうかそうか、たっぷり朝寝ができるわけだ。じゃ、今夜は頑張つてな」

何か表立って訂正するのも憚られる勘違いをされている気がする。ともあれ、これで帰ってくれるなら願ったりだ。二人で見送って本日閉店の札を掲げると、一仕事終えたという感じがする。

「……さて！ ちゃつちやと片付けて、出掛ける準備しよつか」

「……なあ、本当に行くのか」

「タツくんは嫌？ その……恥ずかしい格好するのは」

「俺はいいよ。むしろ、俺も関われる方が気は楽だよ。けどさ、やっぱり地下ボクシングなんて……」

「だーかーらー！ 心配しすぎだって。相手も素人しろうとなんだから、私が負けるわけないでしょ。それに……」

円は両手を広げて、誰もいなくなった店内を振り仰ぐ。

「私が料理作って、タツくんがパン焼いて。子供の頃から夢だった二人のお店が、やっと持てた。これからののに、こんなところで手放すわけにはいかないよ」

若い二人が店を構えて営業するために、当然借金をしている。最近は常連もついて経営は軌道に乗ってきたが、目の前の借金返済のためにはあと少し遅かった。今月中にもう一声収入がなければ、この店と、ここで二人生活していく未来を失う。

そこで円が探してきた収入源が、地下ボクシングだった。琢巳はいくつかある地下リングのうち、自分も参加できるルールのものにしぶしぶ承諾した。

それでも、いざ行くとになると気分が上がるようなところではない。

「そりゃあまあ……店は大事だけど……」

「他にどうしようもないでしょ？」

「そう……そうだよな」

最初は琢巳が金策に走った。だが、借りられる金は開業資金の時点で既に限界だった。自分一人で稼ごうとも思ったが、健康なだけの男が一度に大金を稼ぐ方法はとうてい見つからなかった。

ちなみに、男が出る地下ボクシングもあったが、そちらは徹底的にやり合うタイプばかりで本当に危険な上、格闘技経験のない琢巳では門前払いされるに決まっていた。

「じゃ、辛気臭い顔してないで、早く準備しよ！ タツくんだって、どっしり構えてれば結構かっこいいんだから」

結局のところ、琢巳が円を止められたことなど一度もない。円に引っぱられて地元を遊び回り、留学し、教会に行き、不動産屋に行った。今さら地下ボクシング程度に行かないなんてことにはならないのだった。

2

煽情的なピンクの照明。気配はすれど顔の見えない観客席。その中央のリング、赤コーナーに琢巳は全裸で縛りつけられていた。

会場は都会の高級ホテル地下。入るだけでも自分達では場違いなようで随分ずいぶん緊張したが、ここまで情けない姿にされると、もうどうでもよくなってくる。

「タツくん、大丈夫？……えと、寒くない？」

「寒くはないかな。恥ずかしさも……まあ、観客の様子は分からないから」

「むーっ……！ タツくん結構いいカラダしてるんだから、もうちよっと自覚して」

円は真っ赤なボクシンググローブで、ぼすぼすと琢巳の雄っぱいを叩く。

身長175cmの琢巳は、学生時代から続けている水泳の甲斐あって筋肉質だ。軽く盛り上がる大胸筋、後ろ手に縛られた上腕三頭筋は頼もしく、正座で圧迫されている大腿四頭筋は岩のよう。温和で無害そうな顔とのギャップもあり、タツくんは結構モテる……と、円は思っている。

不思議と琢巳自身が実感したことはないのだが。

一方の円は、赤いビキニスタイルにボクシンググローブという挑発的な出で立ちだ。やるからには勝者のファイトマネーはもちろん少しでもおひねりを稼ぐ、ということ、円の健康的な魅力を引き出すべく二人で選んだコスチュームだ。

日々厨房に立つ脚は、女性的な丸みを帯びながらもしなやかな筋肉の存在を感じさせる。リングシューズの無骨さに負けない機能的な脚だ。

丸くくびれを描く腰は鮮烈なビキニパンツに包まれ、太ももと鼠蹊部、下腹部とおへその境界を強調する。丸く赤いお尻は、男の原始的な劣情を煽ってやまない。

胴ははっきりとくびれを残しつつ、腹筋にはうっすらと縦筋たてすじが浮いている。その上には暴力的な存在感の乳房が、真つ赤なビキニに捕まって揺れている。開放された肌色の上部には、ウォーミングアップと会場の熱気で玉の汗が落ちる。くせのあるミディアムロングの髪は、耳の後ろで二つ縛りに。あらわになつたうなじに、赤いビキニ紐がアクセントを添える。

『レディーツス！ エンド！ ジェントルメンツ！ 大変長らくお待たせいたしました！ ただ今より、本日のメインイベントを始めます！ まずは赤コーナー！』

曖昧な桃色の照明とは別の、眩まぶしいスポットライトが獅子谷夫妻に投げかけられる。二人は眩しさに慣れるまで、目をつむって無防備な姿を晒さらした。

『若い約束を叶え店を構えた熱愛夫婦！ しかし世間の厳しさ、二人支え合つて働いてもあとほんの少し資金が足りない！ そこでこのリングに上がつてくれました！ しかもなんと、妻は本場ドイツ帰りのボクシング経験者です！ 皆様、この健気な夫妻を哀れと思し召さば、どうか一層のおひねりを！ 獅子谷円、琢巳夫妻です！』

気怠い拍手に、ようやく目が慣れた円が応える。だが手を振るアピールもそこそこに、円は琢巳の前にひざまず跪いた。その鼻先には、ギンギンにそそり立ち震える男性器。

「あぐ………っ」

円が陰茎を咥えこむと、先端から広がる刺激と暖かさに琢巳が身悶えし、ロープをぎしぎしと揺らす。マウスピースの無機質な滑らかさが亀頭を通過し、唇と舌が竿を撫で上げると、精力剤で既に昂っていた琢巳はたちまち達した。

「あつ………う！」

「んっ………んっ………む！ んぐっ………！ ん、ん………」

吐き出された精液を、円は口腔で受け止める。一度は苦しげにしたものの、琢巳の肉棒を咥えたまま飲み下すと、お掃除とばかり全体を一舐めしてから解放する。

「……ぶはっ！ はーっ、はーっ……ふーっ。ごちそうさまでした？」

「おそまつさまでした？ 何も飲まなくてもいいのに……」

「ダーメ。タツくんの恥ずかしいところは仕方ないけど、こればかりは誰にも見せてやらないんだから」

普段のベッドでは、二人はこれほど積極的な行為はしない。だがこれは、このリングでは必要なことだ。

ラウンド開始前に一回ずつ、セコンドが射精できなければ敗北。それが、このリングのほとんど唯一のルールだ。そのためにインターバルはラウンドと同じ3分間と長めに取られている。だが、縛り上げられたセコンドが自分だけで達するのはまず不可能。ボクサーを完全にノックアウトしてしまえば、セコンドは何もできず敗北する。

『赤コーナー、絶頂を確認しました！ 最初ということもあって控え目なプレイでしたが、精液を人の目に触れさせまいとする健気さにはグッときました！ 果たしてこの二人は何ラウンド闘い抜けるでしょうか！ では続いて青コーナー！』

スポットライトがリングの対角へ移る。照らし出されるのは、同じくコーナーポストに縛られた男と、青いボクシンググローブを嵌めた美女。

『当リングでは3戦3勝！ いずれも厭らしい闘いぶりです。相手ペアを追い詰めてくれました！ 幼馴染新婚夫婦もこの二人の毒牙にかかってしまうのか！ 蛇目じゃのめ夕ゆう、岩田光雄ペアです！』

強すぎるスポットライトにも慣れていいのか、岩田と呼ばれた男は不敵に笑ってみせる。琢巳とくごより一回り大きい、禿頭とくとつの大男。日頃から屋外で動き回っているのか、赤銅色しゃくどういろに焼けた体は筋肉が肥大し、琢巳とくご以上に男らしかった。

岩田も琢巳と同様に、陰部を突き出す形で拘束されている。その先端からは、早くも先走り汗がだらだらと流れていた。

その手前に立つ蛇目は、妖しげな魅力を放つ美女だった。

背中が大きく開いた、黒い競泳水着に白い肌が映える。艶あでやかな黒髪を腰まで流し、長身の体にしなをつくってみせる。

腰や胸こそ円ほどには目立たない細い体だが、脚や腹は猫科動物を思わせるしなやかな肉付き。捉えようとすればするりと逃げてしまいそうな柳腰やなぎこしが、円の健康的な肢体とは違った形で男の本能を刺激する。

品定めする捕食者のような細かい目が、舐めるように円と、その後ろの琢磨を見下ろす。色白の頬と対称的な朱の唇は、原始的な警戒心を煽って目が離せない。

蛇目は岩田に向き直ると、屹立した陰部を一息に啜えこんだ。すらりと整った彫像のような頬が、亀頭に押され歪に膨れ上がる。二度三度と体全体を動かして扱き上げると、がんじがらめの岩田の腰が前へ突き出た。

「ふっ……うう……っ！」

「んむ……っ！　ん、んん……ぷはあっ」

射精が終わると、蛇目は口に溜まった精液を岩田の腹めがけて吐き捨てた。唾液が混じったはずの精液は、なおも固形のような粘度を保って落ちていかにい。その色は白を通り越して黄みがかかっていて、岩田の底知れない精力が窺い知れた。

『青コーナー絶頂確認！ 今夜も激闘が期待できる好スタートです！』

一部始終を見ていた円は、顔を真っ赤にしていた。このような行為は覚悟の上でリングに上がったし、自分だってフェラチオは今したばかりだ。だが、蛇目のためらいのない下品な口技は、円の想像を越えていた。

「ま、円、大丈夫か？」

氣遣う琢巳も不安を隠せない。精力にとくに自信があったわけではないが、相手の男は明らかに琢巳より回数をこなせるだろう。それはこのリングにおいては、琢巳が円の足を引っぱるといふことだ。

「だ、大丈夫！ 要はボクシングで勝てばいいんだから！ 安心して、タツくんは私が守るから！」

ぐっ、と力こぶを作って見せる。確かに蛇目は円とは違った女の魅力に満ちているが、殴り合いで円の相手になるとは思えない。体つきの差は一目瞭然、ボクシングの技術だって中学から続けている円には及ばないだろう。

変則的なルールだが、琢巳が参る前に相手を完全にノックアウトしてしまえば勝てるのは確かだ。円なら、不可能な話じゃない。

「そうだな。情けない話だけど、円のボクシングが頼みだ。でも、無理はしないでくれよ」

「もちろん。この土日は店を閉めるけど、来週からはまた料理三昧さんまいだからね」

自分が作る料理の数々を思い浮かべたのか、円の表情が緩む。琢巳はこの素直な幼馴染を守るためなら何だってするつもりだ。今はジタバタもできない役回りだが、せいぜい頑張ろうと胸に誓った。

『それでは皆様、お待たせしました！ ラウンド無制限、射精せなくなるまで終わらぬデスマッチ！ いよいよゴングです！』

カーン！

円がマウスピースを啜えると同時、試合開始のゴングが鳴り響いた。

「じゃ、行ってくるよ」

円は一声かけると、返事も待たず飛び出した。リング中央よりやや青コーナー寄りで、蛇目と対峙する。琢巳にとって見慣れた円の背中中は頼もしいが、長身の蛇目と向き合うと頭半分は差がある。

円は敢えて射程圏内に踏み込むと、上げたガードを蛇目のジャブが叩く。間髪入れず右ストレートがボディへ打ち込まれ、同時に蛇目はバックステップ。

「うつぶう……」

『ファーストヒットは蛇目だあ！ ボクシング経験が注目された円、しかしリーチの差は厳しいか！』

円にとってリーチの差は覚悟の上。それより、思っていたよりちゃんとしたパンチが来ると分かったのが収穫だった。ジャブを当てておいてボディ。それも、ちゃんと腰の入ったブローだ。威力はそれほどでもないが、隙だらけのテレフォンパンチでも叩くだけの手打ちでもない。ちゃんと練習したフォームと体重移動だ。

そして、打つたらすぐに後退して有利な距離を保つ。自分の長身を活かした闘い方を意識している。ボクシングとは名ばかりのじゃれあうような殴り合いを想像していた円は、あらためて気を引き締める。

もつとも、蛇目は思ったよりちゃんどボクシングができるけれど、いきなり手の内を明かしたのはいただけない。舐められているというより、それしか出来ないのである。駆け引きを仕掛ける気配もなく、顔は笑っていても目つきは固い。パンチに集中していて余裕がないのだ。アナウンスは3戦3勝と言っていたが、おそらくここでしか試合経験がない。

そういうことなら、と円はガードを上げてにじり寄る。蛇目は退廃的たいはいな雰囲気とは裏腹に堅実なワンツーを繰り返す。円がロープ際へ追い込もうとしても、あとちょっとというところでするりと逃げてしまう。

『蛇目の堅実な攻めに円手が出せません！パンチを浴び続け、動きも鈍ってきたか！このままでは旦那の貞操ていそうを奪われてしまうぞーっ！』

逃げる蛇目は、追いかけてくる円との距離が広がっていることに気付いた。今日の相手はボクシングに自信がありそうな女だったが、逃げないせいで案外早くボデイが効いてきたか。そういうことなら、単調になぶ必要なんてない。円が追いついてきたところに、お決まりのワンツ―。後ろ脚へ重心を戻して、いつも通り退がると見せかける。追いかけてくる出鼻目でばな掛けて、ぐっと後ろ脚を蹴り出す。ウブな顔面を打ち抜く右ストレート。

ドズウツ！

「……つぶ」

『カウンタ―ツ！ 蛇目の追撃を切って捨てる、強烈な左ボデイフック！ 蛇目の脚が止まってしまったあ！』

円は身をかがめて蛇目の懐ふところへ飛び込み、拳を叩き込んでいた。ボデイを打ち抜かれた蛇目は衝撃に目を見開き、半開きの口からはのっぺりしたマウスピースが覗く。振り抜いた右ストレートは空を切り、ぶるぶると震えていた。

「あなたの腰の引けたボディブローなんて、12ラウンド貫い続けたって効かないわよ。やらしい企みも顔に出すぎ。そんな付け焼刃じゃない、本物のボクシングってやつを見せてあげる！」

バキッ！ バスウツ！ ズムンツ！

「はぶっ！ ふぶう！ おぐっ……うえええ……」

顎あごを打ち上げる左フック。飛んだ頭を押し戻す右フックの打ち下ろし。最後に、無防備な鳩尾みぞおちへアッパーを振ねじ込むと、蛇目の膝が折れた。

『ダウン！ たった4発で蛇目が沈んだあ！ リーチの違いをもっともしい、圧倒的な実力差！ しかしボクシングだけで勝てるほど甘くないのが当りングであります。果たしてそちらの方はどうでしょうか!？』

蛇目がキャンバスに転がっている間に、円は蛇目が守っていた青コーナーへ向かう。もう一人の対戦相手、岩田が陰部まるだしで待ち受ける。

「ぐっふっふ……かわいらしいお嬢さんだが、ワシのモノに怖けづかんでくれよ」
「言つてなさいよ。何よこんなもの……」

塚巳にしたように、あるいは蛇目が岩田にしたように、岩田の肉棒の前に跪く。円は塚巳以外のモノなど見たことはないが、アレは大きい方らしい、ということを知っていた。夫婦の営みも最初のうちは苦しかったが、交換できるものでもないので耐えているうちになんとか慣れた。

だが、岩田のそれは塚巳のモノより明らかに大きかった。赤黒く脈うつつ外見、むっとする熱気と体臭がさらに迫力を与える。獲物を前にした獣の涎よだれのように垂れ流される先走り汁、先ほど射精してうち捨てられた精液の量は、普段の塚巳とは比べものにならない精力を予感させる。

こんな男にめちやくちやにされたら、という想像に背筋が震える。落ち着け、この男は私に指一本触れられない。責めるのは私だ。

意を決して、凶悪なその先端を啞え込む。愛する夫のものとは似ているようで違う触感、口腔に広がるキツイ臭いに嫌悪感が走る。だが、責めなくては。亀

頭を唇で甘噛みしつつ、先端を舌で舐め上げる。ぬめつとした先走り汁が舌に広がり、自分の唾液と混ざって口中に広がる。

「んっ、ふっ、ちゅぶ……むちゅ……」

「はふう……むふう……んっ……腰が引けとるし、テクもさっぱり……だが、その初々しさがグツとくる……！ おい蛇目、早く立ってくれんとイカされちまうぞ！」

呼びかけられた蛇目は、首を振りお腹を抑えながらも、既にキャンバスから頭を起こすまでには回復していた。だが、座り込んだままパートナーが犯されるのを見つめるばかりで、立ち上がるうとはしない。

「いくらでも勝手にイケばいいでしょう。それが目当てのくせに。そんなことでイチイチ呼ばないで、休ませてよ」

「おうおう、フラれちま……あぐっ、そ、それぞれ……っ、射精るッ！」
ドプッ！ ドピュピュッ！

岩田が僅かに許された範囲で腰を突き出すと同時、円の口へ精を放った。第一陣の量と粘度に思わず口を離れた円は、残りの精液を顔で受け止める羽目になった。

「うべえ……けほっ、かはっ！ ペっぺっ！ うえ、最悪……」

「うんうん、ぶっかけた女子には蔑みの目が似合うのう。そんな目で睨にらまれたら、また元気になっちまう！ そら、もう一本いつとくか？」

円が思わず、露骨に嫌そうな顔をした瞬間。

カーン！

『ここで第一ラウンド終了のゴング！ 先制された青コーナー、続けての射精は間に合うでしょうか!? 一方、射精を奪った円選手は、白濁液はくたくえきまみれの顔を早く拭きたいところでしよう!』

円は何も言わず、コーナーへ戻る。ゴングと同時に立ち上がった蛇目は、軽やかとはいかないまでも、しっかりした足取りですれ違う。

「お……おかえり、円。幸先さいさきいいスタートだな」

妻を矢面やおもてに立たせている以上、琢巳はせめて平常心を保ち、セコンドとして精神的に支えたいと思っていた。しかし、自分以外の男の精液を浴びた円の姿に、心がささくれ立つのを抑えられなかった。

「ん……ただいま、タツくん。さっそくだけど、早く済ませて休もう」

「お、おう。お願いします」

第一ラウンド開始前と同様、琢巳のペニスに正対せいたいしてしゃぶりつく。岩田の臭いと味を上書きするかのようになり、舌に、頬に、マウスピースに擦すりつける。怒張の敏感なところを、柔らかい粘膜が絶え間なく包み込む。

懸命に顔を動かして愛撫する円の髪から、ふわりといい匂いが立ち上る。軽く汗ばんだ熱気が、円の健康的な魅力を引き立てる。同時に、自分のものではない精液の臭いが混じり、琢巳は下腹部にいつそう力が入るのを感じた。

満足した円が肉棒を根本まで飲み込んで吸い上げると、琢巳はたちまち達した。

「あっ……く、円、激し……う、出るッ！」

「ん、んぐ、ん……ぷはっ！ けほ、こほっ！」

琢巳の激情を喉奥のどおくで受け止めた円は、粘つく精液を強引に飲み下す。

「……はあ。ごめん、ちよつとやりすぎた、かな……」

「いや、あんまり加減できるものでもないだろ。変に加減して敗北なんて馬鹿らしいしな」

『赤コーナー、青コーナーとも絶頂確認！ 第一ラウンドからダウンを奪う激しい展開ですが、両者まだまだ余裕か！ この先の激闘に期待が高まります！』

円と琢巳が青コーナーを見ると、岩田は蛇目のおざなりなグローブコキで精液を吹き上げていた。ラウンド終了直前に円が抜いたばかりだというのに、何日も禁欲したかのような勢いだ。特製の精力剤を飲まされているとはいえ、岩田の精力は底が知れない。

「……ま、まあ、ボクシングでは私の圧勝だし！ 2倍でも3倍でも無駄打ちさせて、とつとと終わらせてやるんだから！」

「そ、そうだよな！ ボクシングで勝てばいいんだ。ほら、顔拭くぞ」

射精が済めば、セコンドも次のラウンドまで解放される。琢巳は久々の自由を味わうのもそこそこに、円の顔にタオルを当てる。岩田の精液を拭き取ることはできるが、どうしてもべとつく跡が残る。これ以上は、石鹼せっけんで洗わなければ落ちないだろう。

「簡単には取れないな……。悪いけど、今はこれで我慢してくれ。ほら、次はマウスピース出して」

「ん……」

円が血色のよい唇を突き出す。その割れ目から、のっぺりと白いマウスピースが顔を出す。琢巳の手にこぼれ落ちたそれは、円の唾液と、口に出された精液にまみれていた。

円は塚巳の射精は喉奥で受け止めていたから、マウスピースに絡んでいる白濁液は、浅く啜えていた岩田のもののはずだ。湧き上がる乱暴な衝動を堪えて、塚巳は丁寧な円のマウスピースを水で洗い流す。

ビーツ！

普通の試合より長いインターバルだが、粘つく精液と格闘している間にあっという間に過ぎてしまった。セコンドアウトの時間になれば、塚巳は再びコーナーストに縛りつけられる。

「じゃ、また行ってくるね。次はもっと早く仕留めて、2発は抜いてやるから」

第二ラウンドは円の宣言通り、開始早々のダウンから始まった。蛇目は第一ラウンドでダウンしたダメージが回復していかないのか、フットワークの速度が落ちていた。円はボディを貰いながらも強引に接近し、得意の左フックをボディに叩き込む。その一撃で蛇目は崩れ落ちて、円の右フックは空を切った。

円が啞えて舐め上げると、岩田は簡単に吐精した。衰えない怒張を前に呼吸を整え、少し逡巡しゆんじゆんした円は2発目を狙って再び啞える。ラウンド中に抜けなければ、かえってインターバル中の射精を楽にしてしまう。そんな円の心配とは裏腹に、岩田はラウンド終了間際にまたしても射精した。

その間、蛇目は立ち上がらず、縛り上げられたパートナーがされるがままになっっているのをただ眺めていた。

そんな一方的な展開が、第六ラウンドまで繰り返された。

試し読みはここまでとなります。以降、試合シーンが約2万字、女性視点で男性主導のHシーンとエピソードが約1万字あります。試合終盤では互いに引かない打ち合いになります。また、試合の途中で円が脱ぎます。戦略と体力消耗以外に性行為自体がボクシングに影響することはありませんが、こういうルールですのでご注意ください。

被虐連理の地下リング (体験版)

発行：柱前堂

連絡先: niryu_box@yahoo.co.jp

著者：にりゅー

Pixiv: 1827721

twitter: [@niryu_box](https://twitter.com/niryu_box)

初版：2019年8月9日

本作品の、引用に該当しない無断の転載、転売、
配信を禁じます。